

# 中予地方局産業振興課『普及だより』

令和3年2月発行

地域農業育成室・産地戦略推進室

	〒790-8502	松山市北持田町132番地	tel (089) 909-8762
伊予農業指導班	〒799-3122	伊予市市場127番地1	tel (089) 982-0477
久万高原農業指導班	〒791-1202	上浮穴郡久万高原町入野263番地	tel (0892) 21-0314



## 豪雨災害からの復興と果樹産地強化を目指して

平成30年7月豪雨で被災した柑橘園地について、中予地方局では、松山市及びJAえひめ中央と連携し、スピード感を持って改良復旧工事の早期完了と営農再開に向けて取り組み、高浜地区では、令和2年6月末に県内初となる改良復旧工事が完了したことから、苗木の早期成園化に取り組むなど、被災前より数段パワーアップした産地づくりを進めています。

同地区のモデル園地では、マルドリ栽培（防草シート＋点滴かん水＋液肥）を導入したことにより、苗木の樹冠拡大率が慣行区の1.4倍となり、他の被災園地の支援活動の一助となることを期待しています。

また、中予の主力品種である伊予柑の被害大きく、立て直しが求められていることから、当課では、令和元年度から3年間、伊予柑のモデル園地で樹形改造、園内道設置、緩効性肥料の利用、収穫・選果方法の改善、ドローン防除を組み合わせた超省力化技術実証に取り組んでいます。傾斜地におけるドローン防除実証では、防除時間が手散布の90%以上の削減となるなど、栽培管理をこれまで以上に省力できれば、余剰な時間を面積拡大や他の品種導入に充てることができま

す。当局では、これまで培った経験を生かし、次代につながる果樹生産基盤を着実に推進するため、今後、被災園地の松山市由良地区を含む6地区で、樹園地の再編整備が計画されており、局・松山市・JAの基盤整備部門と営農支援部門が横串で連携し、柑橘園地再編整備から担い手への農地集積・高収益営農まで包括的に支援する「松山地区災害復興・樹園地再編ワーキングチーム」を県内で初めて構築し、柑橘産地の復興と儲かる未来型農業の実現に一体的に取り組んでいます。



【ドローン防除実証（6～9月に4回）】毎回約20人が見学。



【高浜復旧モデル地区での早期成園化実証】

夏の高温乾燥期も少量多灌水により苗木の生育は順調（左）。ワーキングチームで現地視察し、技術情報共有と連携強化を図る（右）。

## 高品質枝物産地の育成を目指して

ユーカリは、露地栽培が可能で軽量の品目であり、市場からも安定的な需要があることから、現在管内では、生産者 124 戸、栽培面積 1,256 a となっています。

しかし近年、春季に原因不明の株枯れ症状が発生し、生産量や品質が低下していることが問題となっています。

そこで、地域農業育成室や J A、市、研究機関が連携しプロジェクトチームを設置し、調査ほ場での発生株での病原菌の鑑定、栽培管理や同病気の発生状況に関するアンケート調査を行い、問題解決にあたりました。

その結果、病原菌は特定できなかったものの排水の悪いほ場での発生が多いことから、ほ場での排水不良による根腐れが主な原因と考えられました。また、アンケートでは、約 4 割の農家がユーカリを増産したい意向であることも分かりました。

このため、同チームでは、排水対策の試験ほ場を管内に数カ所設置し、ユーカリの生育や株枯れの発生について調査するとともに、栽培面積拡大に向け優良苗木の安定供給を図るため、研究機関と検討しています。



試験ほ場の設置



排水対策試験ほ場の設置

## 「甘平」の高品質安定生産を目指して

### — 隔年結果の改善と裂果対策の推進 —

産地戦略推進室は、県育成品種「甘平」の連年安定生産に向け、問題となっている隔年結果の是正や裂果の防止を図るため、管内のモデル園地で有望技術の実証や調査を行っています。

これまでの調査で、隔年結果については、主要な枝ごとに毎年果実を交互に着果させる「大枝別交互結実法」により、通常の栽培に比べて毎年安定した着果量が確保されています。また、裂果の少ない園地では、多い園地に比べて土壌の深くまで根が伸長しており、土壌の乾湿差を小さくする灌水管理が徹底していること、根の浅い園地でも多頻度灌水によって裂果率を低く抑えている事例も確認できたことから、引き続き調査を実施して高品質安定生産に繋がります。



講習会での栽培指導



大枝別交互結実法



裂果が少ない園地の根の分布

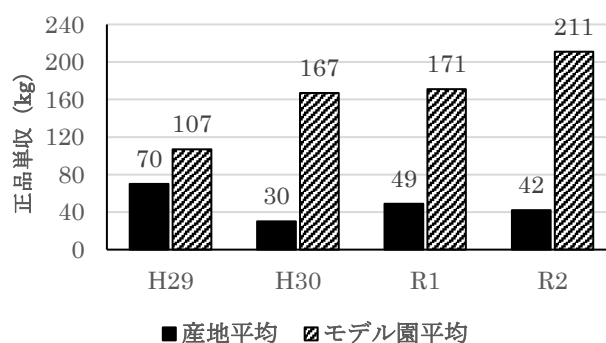
## “愛あるブランド” 中山栗の産地を元気に！！

伊予農業指導班では、県の“愛あるブランド”「中山栗」産地の再興を目指し、伊予市中山町を中心に、①低樹高化剪定、②園地の品種構成に応じた防除時期の見直し、③肥効調整型肥料による施肥への切り替えにより、高品質・高収量化及び省力化技術を推進しています。

H30 から技術実証を行ってきたモデル園（12 園地）では、徐々に収量や品質が向上しており、R 2 は目標としていた正品平均単収 200 kg を超えることができ、これらの技術を生産者へ普及し、中山栗の産地力向上を目指しています。



低樹高化 (3.5m 以内) が進んだ園地



産地とモデル園の正品単収比較

## 細霧冷房でトマトの夏季高温障害回避

久万高原町の夏秋トマト栽培では、夏季の高温により生理障害果（裂果など）の発生が多く、収量・品質低下の大きな要因となっています。そこで、細霧冷房によりハウス内の温度を低下させ、高温障害回避による収量・品質向上について実証しました。

細霧冷房の導入により、慣行栽培に比べハウス内の日中温度が約 5℃ 低く、湿度は約 10% 高く推移し、可販量、秀優品率の向上、規格外品率の低下など、生産性や品質が向上しました（表 1）。

また、裂果数の減少や裂果の程度も軽くなるなど、高温障害回避技術として効果が高い結果となりました（表 2）。細霧冷房は農薬や液肥散布に活用でき、農薬散布作業等の省力化が図れるほか、夏季のハウス内作業環境の改善につながる技術として生産者への導入が進んでいます。

細霧冷房：ハウス内に細かな霧を一定の時間間隔で噴霧し、気化熱でハウス内温度を低下させる技術

表 1 収量・品質（10 a 当たり）

試験区	総量 (kg)	可販量 (kg)	秀優品率 (%)	外品率 (%)	平均花房数 (段)
細霧冷房区	14,148	11,595	71.8	18.0	15.2
慣行区	14,053	8,972	57.1	28.3	15.2

表 2 裂果の発生程度

	裂果数／収穫果数 (%)	可販裂果数／裂果数 (%)
細霧冷房区	10.3	71.6
慣行区	22.2	57.3